

黎明期の神丘

ト部信臣¹⁾

Beginnings of the Kamioka village

Nobuomi URABE¹⁾

1.はじめに

今金町神丘は、キリスト教徒による開拓地として広く知られている。「北海道開拓秘録（若林 功, 1964）」にもややセンセーショナルにその開拓の過程が収められているが、本論では実際の神丘への入植が北海道の開拓政策とどのような関わりを持っていたのかを見していくこととする。

2. 北海道殖民地選定区画後志国利別原野“中「トシベツ」原野”

北海道殖民地選定区画事業は、移民を入れる前に農業適地を調査、区画して全体計画に基づいて進めたところがこれまでの開拓政策と根本的に異なるものであった。調査を担当したのは札幌農学校第1期生の内田 游、柳本通義の近代科学を身につけた新進気鋭の者であった。この事業は明治19（1886）年から始まり、後志国利別原野は明治22（1889）年に実施された。利別原野は、上「トシベツ」原野、中「トシベツ」原野、下「トシベツ」原野に分けて報告されているが、神丘地区は、中「トシベツ」原野である。資料1に示す通り「地理」、「土性」、「植物」、「排水」、「用水」、「運輸」の項目について調査結果が報告されている。

3. 犬養 毅外8名の土地貸下後志国利別原野“中「トシベツ」原野”

従来、志方之善、丸山要次郎が未開の地を探検して神丘の地を探し当てたように書かれているものが多いが、実際は測量し、区画を終えた土地への入植であることを明記したい（資料1）。

当時の国会で発言力を得るには、大土地所有が最も確かな手段であるため、北海道の未開地に中央の政治家が食指を動かしてきたのであるが、神丘のイヌカイチもそのひとつであ

第1図 未開地貸付台帳

(北海道庁、明治19~27年)

¹⁾新十津川町立吉野小学校, Yoshino junior school, Shintotsukawa, Hokkaido, 073-13 Japan.

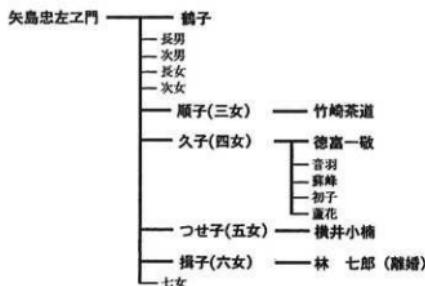
った。改進党の犬養 純外 8名が明治24（1891）年3月12日後志国利別原野“中「トシベツ」原野”2025万坪の貸し下げを受けている。犬養 純が代表であったため開拓期の人々は、ここを「イヌカイチ」と呼んでいた。犬養 純、尾崎行雄と言えば、薩長藩閥政治を鋭く批判した論客であったが、その彼らが薩摩藩の巣といわれた道府を通して、大土地所有にのりだしたことは、注目に値する。第1回中の田中賢道とは熊本県自由党の領袖であり、一木富太郎は田中賢道の秘書である。土地の貸し下げ地は、まちがいなく開墾を終えたという成功検査を受けて、払い下げになるシステムになっていた。当時は、土地の貸し下げを受けても、開墾が思うように進まないのが、現状であった。この貸し下げを受けた土地をどのようにして、開拓を進めるかが大きな課題となっている時に、志方之善等の動きが出てくる（殖民地査定報文の10年後は殖民状況報文に詳しい；資料2）。

3. 志方之善、北海道開拓を志す

志方之善は、元治元（1864）年7月17日、父之裕、母ヨリの長男として熊本県山鹿郡来民町（現山鹿市）に生まれた。14歳の明治2（1869）年義兄長平を頼って神戸に出た。彼は神戸で英語の学習の後、陸軍教導団に入隊した。教導団には2年いたが、胃弱のため除隊した。失意の底に落ちた志方之善に救いの手を差しのべたのは、彼の親族のひとり鈴木陸軍大佐であった。鈴木は、志方を新島襄に紹介し、同志社の普通校に入学させた。同級生の藤原直信に勧められて新島邸の家庭集会に参加。明治19（1886）年に新島 襄から受洗して同志社教会の一員となり、その1年後に伝導者を志して同志社神学校に入学した。明治23（1890）年同志社の創立者新島 襄は大磯で病に倒れ、志方之善等が看病をして尽くしたが明治23（1890）年1月23日息をひきとった。遺言は徳富蘇峰の筆で書かれた。1月24日柩を京都に運ぶ列車の中で志方之善は、初めて徳富蘇峰に会い、「君のことは、遺言の中にもあったよ。」と声をかけられる。1月27日新島 襄の葬儀が行われ、志方之善は南禪寺から若生寺の墓地まで柩をかつぐ一員であった。葬儀には、京都府知事北垣国道も参列していた。北垣国道は、このあと北海道長官となり、貸し下げだけを受けて開拓の進んでいない土地を返還させたことで有名である。また、金原明善とも親交があり、貸し下げを受けて開拓の進まないところを犬養 純に返還させて、そこを金原明善のものとしたことでも、直接神戸の黎明期に関わる人物である。「新島先生のなき同志社は廃屋も同然だ」と志方之善は、同志社を中退する。そしてキリスト精神に基づく北海道開拓に向かう決意を固める。北海道開拓を実現するために志方は、同郷の先輩である大宮教会の牧師大久保真次郎夫妻を訪ねた。大久保は、徳富蘇峰、蘿花の義兄である。志方の決意を聞いた大久保の妻の音羽は、荻野吟子に紹介状を書く。

4. 荻野吟子

日本女医第1号の荻野吟子は、嘉永4（1851）年に埼玉県大里郡妻沼町に生まれた。明治元（1868）年19歳の時、稻村貫一郎と結婚する。明治3（1870）年協議離婚。明治8（1875）年東京女子師範に入学。明治18（1885）年医籍に登録され日本で女医第1号となり、明治19（1886）年には海老名弾正から洗礼を受けてキリスト教徒となって、キリスト教婦人矯風会に参加



第2図 夫人覚醒運動にかかわった矢島家ゆかりの人々

黎明期の神丘

資料2 北海道殖民状況報文（資料提供：北海道出版企画センター）

利別村

地理 西ハ日名川及ヒブミルイナチテ御座羅村ニ隣ヒ北ハ鳥取郡山形

合尔斯所ノ丘陵地内チ其共傍砂分金隠没スルト云ア所ナリ其他ハ僅カニ利別川ノ曲輪ニ敷在スルノメ開シテ利別川南岸ノマリタグレベシ。ジエブンナイン小見モ多少ノ農耕地アリ。

百五十九万九千二百六十坪。樹林地
ニニシ南ハ太郎郡大森村ニ隣ヒ東ノ面占ノ面積都ハ大半ニ居ル七万島

スルノメ開シテ利別川南岸ノマリタグレベシ。ジエブンナイン小見モ多少ノ農耕地アリ。

松原地ニハアブ里ガニカンタリ等ノ諸山満峰シ高寒堅密國境太極界ハ其ニ低キ出港

松原地ニハアブ里ガニカンタリ等ノ諸山満峰シ高寒堅密國境太極界ハ其ニ低キ出港

風船船組シテ四國ハ丘陵地帶ハ以テ名ニ西方向の御用沿岸地カニ一方隅ク利別川ハ島牧郡

第ヨリ奥シカシ多々小笠ヲ除シシモ田園風シ南湖村ハ入ル延坡地數里ノ間平低ノ尾連ナヌ支

流ニハベカラマツブ。下ハカラマツブ。ノリマツブ。トマツケンシノ群山ハ北界ニリ各々源

流ハ北山岳。先シ南下シ御用川ニ入ル。ゲンケオイチャマン。バクダオイチャマン。ヘニ

流ハ南岸ニシテ御用川境ノ山原ニ發シ北界ニ流ハリ。平原ヲ含シ御用川ヘシケオイチャマン。

ヘニシ二里、瓦ル候キ平野ヲ有セリ。

中利別村野。南北利別川左岸南湖ノ山野ニシテ實ハ上流ハカマツブ。及デンホウダツ

テテナ右岸御用川トシテ西ハ日暮川。アミルリナツテ下利別川野ト御用川。御用川西ニ後タガ

北ニ後シ御用川ナルハ西御用川オイチャマン。ハニノ日名別方面ナリ。御用川底。御用川西

等ノ別アリ。

九百三十三万五百三十三坪

内

七万八千五百坪。同林地
百八十六万七千六百七十三坪

同林地
三百七十七万六千三百坪

七十五万坪。

同草原。

五百二十五万二千九百五十坪。
右丘陵及シ原草木林ニ原野ハ森林及シ沼地モ併存候地トナヌト得ヘシ

上性ハ、尺方四尺ノ冲積原ノ上部ハ一寸カ所至テサノ茶色地實根ニドニ一寸乃至三寸五分ノ

大山脈及シ原草木林ニ原野ハ森林及シ沼地モ併存候地トナヌト得ヘシ

上性ハ、尺方四尺ノ冲積原ノ上部ハ一寸カ所至テサノ茶色地實根ニドニ一寸乃至三寸五分ノ

運輸交通。果南ハ尼別山山頂ヨリ東リ北岸ヲ横断シテ運輸村ニ出ル且道ニセバ海岸

リ海岸ニスル運輸二条アリ。ハ今季ヨリ大運輸津留幕藩ニ達シ。ハ重複航急者皆無事ヨリ

ナリ。二尺三寸ノ馬色地舟ナリ。以テ木舟運送スル所也。船頭ヲ設ケス各舟ノ

舟頭。山毛櫸。櫻。柳等より御座候。沃ノ地。草木根シテ生長候。瓦リ。

気候。暖温帯。地勢。ヨリ運送アリ。上御別野。ハ中利別野。ニシテ四十日早ク南湖村ヨリ

ハ十日早ク。九月中旬ニ起シト云フ。積荷ハ西日本ニシテ四月月中旬ニ解禁ス。

ハ八月。運輸水路ノ事。御用川上流ハ利別野。ニシテ九月月中旬ニ解禁ス。

ハ八月。御用川上流ハ利別野。ニシテ九月月中旬ニ解禁ス。

總務課所 設置及ヒ個人借入小免地等アリ總務課ハマツア「バクナツア」等ノ加賀役政之助間
農地ノ移住シテ少戸數九十余年より始古田ハ被者第ニシナ少戸數三十戸人宿、移設立所等
アリ相模側、横浜ビリカベアハ供候院アリ伊波八十余年近處所アリ又今全郡海ノ若干方面
内地内ニセチタニ漢表記立所と云及四十五戸先ナキ金庫產屋ニ及四五年戸アリ前此產屋
大茶園田中郡源ハ「シケオイシヤタス」ハ田中タル堅木所ヒロ口等ノ開闢シテ六十万余
戸小茶園田中郡源ハ「シケオイシヤタス」ハ田中タル堅木所ヒロ口等ノ開闢シテ六十万余
戸本、吉本、西田等ノ前業場在シ各タウナヘアフリ
農業 明治二十七年以降ノ開拓ナドモ原野開拓實驗所ルルマ以テ日月ニ進歩シ明
治三十一年ノ御令ニヨレ、耕種地八十六戸四百歩アリ一戸平均地二町一二十歩ニ
シテ參モ多ニ作ルモノヲ五戸歩内ナリトス作付ハ若葉、稻米、黍、蕷、穀、鶴等、大豆、
豆、小豆、豆芽等アリモテナヌ蚕糞、大豆豆、豆芽アラ丸シ其余ハ豆食料二供セリ若葉ハ
便木樹木ノメヲテ馬糞ツ用ナル能ハス作付小作者ハ七十七余戸貯蓄有百五十
戸ノクアリ小作者ハ未タ數下有年有半シ未定ノモトキハテ其後業者カニシテ業者モ
廣末ニ反對付一付七十戸既乃至一円通ノモノナラン明治三十一年ニ於ケル木村ノ農業地及作付反
別ヲ示セハ

耕種	一	九百廿三
作物及附	一	二四一
取種高	一	九〇六
當初取種高	一	四〇六
耕種	一	九五
作物及附	一	七一五
取種高	一	五〇〇
當初取種高	一	六五五
耕種	一	三五九
作物及附	一	四〇〇
取種高	一	五五二
當初取種高	一	八五七
耕種	一	三四五
作物及附	一	三五九
取種高	一	六五五
當初取種高	一	三五九
耕種	一	二五七
作物及附	一	二五七
取種高	一	二五七
當初取種高	一	二五七
耕種	一	一三
作物及附	一	一三
取種高	一	一五六
當初取種高	一	一五六
耕種	一	五〇
作物及附	一	五〇
取種高	一	五〇
當初取種高	一	五〇
耕種	一	九五
作物及附	一	九五
取種高	一	九五
當初取種高	一	九五
耕種	一	八五
作物及附	一	八五
取種高	一	八五
當初取種高	一	八五
耕種	一	七五
作物及附	一	七五
取種高	一	七五
當初取種高	一	七五
耕種	一	六五
作物及附	一	六五
取種高	一	六五
當初取種高	一	六五
耕種	一	五五
作物及附	一	五五
取種高	一	五五
當初取種高	一	五五
耕種	一	四五
作物及附	一	四五
取種高	一	四五
當初取種高	一	四五
耕種	一	三五
作物及附	一	三五
取種高	一	三五
當初取種高	一	三五
耕種	一	二五
作物及附	一	二五
取種高	一	二五
當初取種高	一	二五
耕種	一	一五
作物及附	一	一五
取種高	一	一五
當初取種高	一	一五
耕種	一	八
作物及附	一	八
取種高	一	八
當初取種高	一	八
耕種	一	一八
作物及附	一	一八
取種高	一	一八
當初取種高	一	一八

備考 本年取種八月水不足ハ八月水不足アリ各農場皆用ノ開拓二度繰シ開拓ナタセリ
本村ニハ數人ノ大耕地ヲ有スルモノアリ各農場皆用ノ開拓二度繰シ開拓ナタセリ
小作法ハ各農場ニヨリ多少其處ナタセシストレモクハ土地分ニ依リ可成資本ヲ節シ且
ツ小作人ニ本心ア想サシメントス左ニ其概況ヲ示ス

収穫標準溝ゲリ

木村ニハ數人ノ大耕地ヲ有スルモノアリ各農場皆用ノ開拓二度繰シ開拓ナタセリ
小作法ハ各農場ニヨリ多少其處ナタセシストレモクハ土地分ニ依リ可成資本ヲ節シ且
ツ小作人ニ本心ア想サシメントス左ニ其概況ヲ示ス

馬糞高

馬糞高

六月二十日
馬糞高
馬糞高

六月二十日
馬糞高

着手セラ其他野本知正、田中尊達、古賀治三郎、松前謙、細小路筋次郎、廣田安治等ノ十萬坪乃至二十二三万坪ノ貸付地アリ皆四戸乃至五戸ノト作人マ入レナ御堂ニ候ヘリ小作法ハ羅キ商店大地供給者ト略ホ地代ナリ

馬・全戸ニ高木六段ノ役ナリ

商業 明治三十年、長波屋謹以米面酒食住シ日下木屋製、覚夢、本理、猪瀬販ノ小売店五

六アリ皆津瀬市街地アリ而品ヲ仕入、村民ニ供給ス貨物皆萬ニ由テ輸送スルヲ以チタル

不賣ナリ村民ヘ軍ナル品發送入レニハ、羅吉町ニ出ツルマダ合トス

木材薪炭 木材ハ伐林材ヒヒ都等ヲ社本トシテ苦竹薪角百石ノ價九七八十四疊木

角八田五十ナリ薪炭ハ村民ロタニシテ伐リ薪一束ナ付、共成一束十三十四疊紙袋ニカレリ

鐵業 利別川上流ニ砂金ヲ産ス曾特權航行ニ於テ人夫二十余人在シテ鐵道シテ鐵道シテ

シカ長距離ノ取扱事セリ云フ今鐵ヲ多ニ金山ト名シヨリ現キヘ別鐵道サツカルヘシ

ベヨリガニニカシメブノ隣ニ瓦ル利別川河岸一帯ノ地ヘ伊丹市開港駅次第、砂金發送倉庫在

ニシテ時廢シニ日暮セシカ近大ニ瓦道運送キハ僅カ二十人ノニレシム後、モノアルニ

酒キスアシテ紙袋スル益多カラヌ一ヶ年九月廿日内外ナリ引立ガバ、ニセシムペニ詳リ

岡佐良アリ稻穀ノ仲正右門ノ使使シ、一年ノ役職高凡

四十二三万斤ト云、山ヨリ利別川河岸留置マテ本軌敷設ヨロ々衡十斗、古事ア以テ搬

出セリ其利潤可也、而ニ於テ調達費若干生、於チ金額ノ試算可マ得タルモ、各々ケ賄アリ

地佃 土地ノ充實未だ少クテ以チ耕種ナル本草アシテ耕種シ普段莫ハ格ハ一疋歩ニ付凡

五六年内至一四ヲ最善ナルカ如シ

生計 村民中三四戸人アダガクノハ世農也、口子生業トナス移住ノ日遅キテ以子生計

ニ余裕アルモノナシニ明治三十一年及十二年ノ水害ニ罹り治保地ニはるノハ崩屈、國

ニ崩屈人笑之、國有地セリ向ニテ國有地ナスバ只営業無ニトリ得モヤリ、四十五年ノニレニ

ニテニキス皆野參、以テ同官シテ三十一年ノ收穫ハ爾五石、三三ナチナモ落葉

ヲ而ル事遠クシテ深嘆ス田シ得失相抵ハス各期ハ只秋木ナシテ開闢ノ裏事スルノ

婦女子ノ如キハ金タクヌノ善ノ如キ

風俗人情 民族人生事件ナリ方ニシテ風潮カナリ利別川北ノ昌黎寺ニハ専少ノ狂

墨ツ見ルモ極ネ才厚之有岸ハ全ク獨立黒ニシテ一見若ノノ民タルノ如

教育 従多内ニ一ノ尋き小学校ヲ設立、邑邑、利別川河岸三ヶ所ニ設立、小学校ヲ設立

リ然レモ区域広ク事不復ナル以テ向ニケニ增設、計画アリ易小学校ニハ重ナル第

ニテニキスモノナシテ教員不足ナリ教育事務ハ未タ解ク、既に教員少クレ

衛生 村医一名ヲ置キ、其又多キニ在リ飲食水、井水又ハ木ノ水ノ用事運送ノ木ハ飲用

ニサヘルヲ以テ利別川ヲ用ニ

社寺 来タ公ニ届出タル神社ナキモ各部落ニ社祠アリ又秋父多牛ニ其事ノ既教所一ヶ所

アリ

し、風俗部長として活躍していた。明治23（1890）年矯風会は「婦人の議会傍聴禁止撤回陳情書」を提出。神聖な国会に女性が入ると汚れるので議会に入ることを禁止しようとの提案に猛然と反対運動を起こした。この運動が功を奏して国会開設時にはこの項目は撤回されていた。この矯風会の会長は、徳富蘇峰・蘆花らと親戚であった矢島糸子であり（第2図）、メンバーの中に佐々城豊寿がいたので、大久保音羽婦人は志方之善を荻野吟子に紹介したのである。佐々城豊寿の娘信子は国木田独歩と結婚したこととは広く知られている。佐々城家は、仙台で医者をしていて伊達一族が大勢北海道に移住することの中心になって働いたので広い人脈を持っていた。特にクラークの教えを受けた札幌農学校の卒業生は、キリスト教徒の結びつきで固いものがあった。明治20年代前半（1890年前後）は、熊本、横浜、札幌でのキリスト教の活動が目立つが、その具体的な姿をこの矯風会の動きに見ることができる。大久保音羽婦人としては、単に北海道開拓の情報を得る便宜を図るつもりが、事態は予想しない方向に向かった。

5. 志方之善と荻野吟子との結婚

荻野吟子40歳、日本女医第1号で名声もあり、実力もある。一方、志方之善26歳、同志社神学校の学生。この2人が結婚したのが明治23（1890）年11月25日、周囲の人々はアッと驚いた。

6. 志方之善・丸山要次郎のインマヌエル入植

明治23（1890）年、志方は、北海道開拓の構想が固まるとき同志社神学校の先輩の小北寅之助牧師を訪て熊本県自由党首田中賢道に紹介してもらうようにお願いした。小北寅之助の義兄が田中賢道であったので話は早かった。田中賢道は、丁寧な紹介状を犬養 総院に書いた。志方はこれを持って犬養 総院

務所を訪問した。応対に出た一木富太郎秘書は志方に会ったがこの若者に開拓が出来るかと一抹の不安があったが田中賢道の紹介状もあるしむげに断ることもできないので、仮契約を結び現地を見たうえで本契約を結ぶ方策を取った。明治24（1891）年5月、志方之善（27歳）と丸山要次郎（17歳）は、横浜港から出航して、瀬棚の梅花都港に上陸した。それから利別川を逆上り、目名川が利別川に注ぐ地点の左岸に落着くことにした。ここに平成3（1991）年神丘百年を記念してイチイの木で史跡標柱を建てた。横浜を出航して十数日が経過していた。2人は、開墾に取りかかったが、慣れない作業のために思うように進まなかった。蔵や笹の子等を塩漬けにし、鮭・鱈などを貯蔵した。犬養 級事務所と本契約を結び、キリスト教徒の移住を促進するために、志方之善はいったん京都に帰り、17歳の丸山要次郎だけが現地に残る事になった。要次郎は、木彫の作品を瀬棚に売りに行ったり、1合の米で2週間食いつないだり、40日間も蔵の塩漬けで飢えをしのいだりして、越冬した。翌明治25（1892）年春、志方は母しの（70歳）姉しげ（32歳）、同志の原田策郎、笹倉七郎、松田弥三郎等と揃って入植した。しげが中心になって開墾作業を進めたために大いにはかどったという。

7. 天沼家の入植

埼玉県舩羅郡長井村の天沼恒三郎らは、当時最も一般的な、関係書類を役所に提出して土地貸し下げを待つという方法を取った。そのために、役所に提出する書類は膨大だがなかなか土地貸し下げ決裁が出ないという北海道の開拓政策の悪弊に遭遇した。天沼恒三郎が役所に提出した書類は下記の通り。（1）北海道入植のための「団体成業規約書」（2）北海道移住開拓願書（3）天沼家の戸籍証明書（4）太魯郡太魯村官有地貸付願書（5）北海道団結移住開拓志願につき準備手続書（6）北海道移住開拓事業希望につき嘆願書

8. 山崎家の入植

山崎家は、明治26（1893）年に山崎六郎衛門が渡道して以来現在まで続く神丘の“旧家”的ひとつである。入植には以下のようないきさつがあった。

北海道の鉄道は、明治20年代（1890年前後）石炭を求めて伸びて行くが、北関東の鉄道は繭を求めて伸びる。明治25（1892）年関東平野から日本海側に抜ける碓氷峠トンネル工事が完成したため、今までこの峠越えを一手に引き受けている鉄道馬車会社は解散する憂き目にあった。社長の大越米吉は、同時に高崎を拠点に組員400人を擁する博徒の親分であった。ここで身の振り方を思案していた時に天沼恒三郎から神丘に入植しないかとの誘いが山崎六郎衛門にあり、六郎衛門は家族とともに渡道したのであった。

その当時の様子を、山崎六郎衛門の三男・山崎喜三郎（故人；渡道時は8歳）が自ら語ったものが録音テープとして残っている。慎ましい生活中、信仰一筋に生きてきた人生が語られており、当時の様子がよくわかる第1級の資料なので、今回ご子息山崎淳平氏のお許しを得て、以下に資料3として全文を紹介することとした。本回想録は、昭和37（1962）年に今金の五男淳平氏宅にて、山崎喜三郎の喜寿祝いの席で息子の嫁と孫の前で語ったものである。文章化の作業に当たっては、録音音声そのものを文化財資料と考え、極力話者の発音を復元することにしたため、現在では差別的用語とされるものや、方言および口語表現のために読みにくさを作りうる部分も一部にみられるが、純粹な資料の記録・公開という観点からご容赦願いたい。また、（ ）内の注と小見出しは便宜上筆者がつけた。

資料3 山崎喜三郎氏の回顧録

賛美歌87番

87番の賛美歌をみんなで歌います。この賛美歌は、私の父、山崎六郎衛右門が、群馬県高崎の大越米吉という人に導かれてキリスト教の信者になったのですが、その大越さんの大好きで、いいつも愛唱していました。お宅に伺った時、これを掛け軸にして床の間に掛けありました。その導かれた父が、やはりこの87番（恵みの光）を常に愛唱していました。3代目の私が父に習っても、この歌が一番好きで常に歌ってきました。で、この賛美歌をみんなして歌ってもらいます。人生わずか50年、70歳は古来稀なりと言われてきましたが、私は神様のおん守りの中に、その稀なる70歳を突破して、しかも喜の寿と言われる77歳の今日まで生き長らえましたことは神様の深いおん恵みによるものとして深く感謝しております。

賛美歌87B

「めぐみのひかりは やみ路を照らせり、 われらも愛せん」	わがゆきなやむ 神は愛なり。 あいなる神を、
うき雲おおえど さやかに照りいず、 われらも愛せん、	み顔の笑みは 神はあいなり、 あいなる神を、
うれいのときにも なぐさめたまえり、 われらも愛せん、	のぞみをあたえ、 神はあいなり。 あいなる神を、
のみなうつれど とわにぞかがやく、 われらも愛せん、	めぐみのひかり、 神はあいなり。 あいなる神を、」

北海道開拓の立志

思い返しますればまる70年。猛獸の熊をはじめ、あらゆるけものが生息し、大木が鬱蒼と生い茂って日中でも太陽をはっきり見ることのできない、全くの原始林であったインマスエルの地に入植しました。

その当時、交通が如何に不便であったかを申しあげれば、高崎からの手紙は20日以上もかかるなければまぜんでした。時には、ずっと後から出した手紙が先についたり、また、ある時は、少しまぐれた手紙は、半年以上もかかって配達されたこともあります。

私は明治19年6月14日群馬県碓氷郡坂本という小さい町に生まれたのであります。父が私たち数多い子どもたちの将来を思い、北海道開拓の志をたてたのでありました。さらに、大越翁が「開拓の当初は、とてもとても困難が伴うのだが、将来は必ず子どもたちをみんな近くに家を持たせ、罪のない農業を楽しくできるのだから速やかに渡道しなし、必ず援助の手は続ける。」とのお言葉。父は、実父以上に信頼しておった大越さんの激励の言葉に少しの躊躇もなく、断然、渡道を実行したのでありました。

北海道に向かって

それで、明治26年5月半ば高崎駅から乗車し、東京の上野着し、当時有名であった「がんなべ」という食堂で昼食をすませ、かけあし同様に動物園その他を見物して、夕刻、新橋駅から横浜に着いたのであります。ところが、北海道行きの汽船がないので4日も滞在致しました。ようやく、「山城丸」というかなり大きな汽船が函館行きというので、ただちに乗船致しました。幸い、好天に恵まれ、波もなく、仙台沖の金華山、くじらの潮を吹くなどを眺め塩釜港に一泊し、翌々日函館に投宿しました。函館に上陸し、山田という旅館に投宿し、ところがここでも、また、瀬棚行きの汽船がないので3日も滞在いたしました。

回漕店に交渉の結果、寿都行きの後志丸を特に瀬棚につけてもらうことに話が決まり、いざ上船と波止場に行き、解に足をかけたとたんボーと汽笛一声。その後志丸は出帆してしまいました。船頭が如何に懸命に漕いでても、もうあの船には追いつかないといふので、私たちはいったん宿に引き返しました。それは、旅館の番頭が不注意のため出帆の時間を間違えておったのでありました。さあ大変、こちらの回漕店から江差の回漕店に電報を打ってもらい、私たちの着くまで待ってもらうことにして、二台の馬車を借り切り私たち親子7人と父が2年ほど使用していた野上英黄(21歳)奉公人と、現在今金の街の由浅食堂の先代由浅為太郎(22歳)の青年と同勢9人が2台の馬車に分乗し、五稜郭、亀田、桔梗、七飯と一緒に走らせ、元の本郷にて馬を取り替え、あの険しい中山峠も無事に越し、江差間近になって日が暮れてしまいました。江差の灯がちらり見え始めたとき、港で汽笛が鳴

りました。これを聞いて、また、乗り遅れたのでないかと一同大きな心配をしました。それでも、駆けつけてみましたら、その船は入港したばかり、さっそく船に乗り込み一夜をあかし、翌日午後1時ころ三本杉に上陸いたしました。

瀬棚での生活

当時瀬棚の町にはアイヌの人の家と合計30戸ほどの家よりなったのであります。商店としたものは、三本杉に「山に一ダ（屋号）」という極貧弱な雜貨商がただ一軒、旅館としたものは会津の街に山一大島勘左衛門といふただ一軒。その主人勘左衛門さんには何かと便宜を図っていただき、随分お世話になりました。そして、父たちは、わらじに足をかため、各々、縄、籠、道具、食料、寝具などを背負いまして4里の道をインマヌエルの地に小屋掛けに上ったのであります。

残ったのは母と8歳になる私と弟と妹の4人でしたが、何分にも旅館には座敷としたものは2間しかないので、長く私たちを置くことはできないというので、主人がアイヌの空き家を借りてくれました。戸じまりのない、すごいあばら家に10日あまりも住まつたのであります。そうしておるうちに、たちまち私がアイヌのコスボと仲良の友達になってしまい、ある日私がマッチを持って遊びに行き、コスボと2人で風よけにしたあつた丈の高いドンゴ（イタドリ）、これを細かく折り、火をつけ始めた時にハボに見つかり大目玉をくらひ逃げて帰りました。ハボというのはお母さんのこと、コスボというのは少年のこと、青年のことはヘカツ。女子青年のことはメノコといいました。そのメノコが結婚すると口に入れ墨をするのが、アイヌの風習であります。そのハボは、酋長の連れ合いでもあったのか、とくにビーンとはねあがつた入れ墨をし、ものすごい体格のいい、一見鬼のように思われる。そのハボが私の後を追いかけるようにして母のもとにきて、こちばは分かりませんが、「子どもにマッチを持たせ、危ないでないか。もし、火事になって小屋が焼けたらどうするか！」との意味を大きな声でなりつけました。母は恐ろしさのあるぶるぶるふるえながら平身低頭、両手をついて平謝りに謝罪したのでありました。これを見て私は、「ああ、悪いことをした。母をこんなに合わせて本当に済まなかった。」と後悔をしました。

インマヌエル（神丘）に向かって

さあ小屋もできた、荷物もだいたい運んだ、「さあ、行こう！」と父は、適當な荷物を背負い、清太郎は3歳になった妹を背負い、母はわらじの履き方を知らないので、父に履かせてもらい。おまけに座面の間近い大きなお腹をかかえながら、トボトボと歩行しました。丹羽さんのお宅の付近までは、どうにか道路として形づくられておりましたが、それからこっち、一里あたりは、僅かに葦を刈り分けただけ、さかさ川、フシコ、メナ、チヨボシナイトと4本の川にはどこにも橋がかかっていません。こちらの岸の木を切り倒し、向こう岸に渡しその上をかろうじて渡り、ようやく着いた所に、前にも後ろにも垣根がなく寝ていて月も星も見ることができる葦ぶきの中に入ろうとしませんでした。さすがの父も、これには閉口しました。

インマヌエル（神丘）での生活のはじまり

そうした後のある日、やせた背の高いアイヌのおやじがマスクを2本下げて来て、父の前に突き出し、これを貰ふとのことでありました。父が何ほどかとたずねましたら、お金でなく米と交換しろとのことでありました。米なら何ほどと言いましたら、3杯くれとのこと、さあその3杯が分からぬ。茶碗に3杯か、お皿に3杯か、でも、母は、やはり1升ますのことだろうと3升の米をやってきました。さあ、それが大失敗。あとで分かったのでありまするが、その1杯というのは2合5勺のことでありました。とぼしい中から3升の米をやってしまい、残り少ないので、お粥をすりながらそのマスクを剥身にして食べました。

そして、翌7月の半ばの頃、少し強い雨が降ったと思いついたら、あの利別川が氾濫し、大洪水となりました。父は、こうしてはおられないぞと兄たちと水を漕ぎながら近くにあった細い木を切り集め、小屋の中に2尺くらいの高さの柵をつくりました。その柵の上に遭難をしました。みると、どんどん増水するので母は、もうだめだ！みんな離れ離れにならないように、身体と身体を縛り合い、ともに死のうと覚悟をしたのでありました。でも、床の上まで水が上がらないで、水は引けました。

その水が引けると同時に、母は産氣をもよしたのであります。医者もなければ、産婆もない。困り切ったその時に、昨年、一昨年95歳で昇天されました天沼のおばあさん、当時29歳のおばさんのが、産婆の経験は更にないのですが、何かと親切に世話をしてくれましたので、その柵の上で男の子を安産致しました。そして、秋も濃くなりました頃、家中の者が全員サナダメシを出しました。私の場合なかなか出て来ないので、兄清太郎が棒切れにからませ、静かにしてくれました。それは、とても大きいので地面に引き出して見たところ12尺もありました。

いよいよ正月がきたのに餅をつくことが出来ませんでしたので、兄常次郎は、3里向こうの鋸という部落（今の北檜山町字豊岡）九左衛門といふ農家がありまして、その九左衛門さんに頼んで栗の白を4升分けてもらってきてました。それで栗餅をつき、だしも何も入らない、ただの大根葉の味噌汁で栗餅の雑煮を作り、これを食べて元旦

をお祝したのであります。

雪解けを待って早々に開墾と書きつけに励んだのであります。夏ともなりましたら、蚊とブヨとの大群が襲撃し、日中でも農場の仕事が出来ないのでボロを縫いて、それに火をつけ、腰に下げて仕事をした。そうして夕方になるとヨモギ、その他の雑草を刈り集め、小屋の入り口でいぶすのであります。そんなことに少しあれず、小屋の中はワンワンとむれかえるほどであります。どうしても茶碗を持って食事することが出来ないので蚊帳の中で食事しました。おまけに、蚊のマラリヤ熱（オカリ）と言うのが流行しまして、親子3人、4人が枕を並べて、うめき苦しんだ場合もございました。こうしたことは、1年や2年ではなく、5年も6年も続いたのでありました。その年もたびたびの水害と霜の早いので、作物は皆無の状態がありました。食料確保というので手帳をこしらえて、雪の降るのを待って兄が囃（北條山町字豊岡）から芋を2俵も3俵も積んで繩をかけ、えんやら、えんやらと3日も続けて運搬したのであります。今日はいつもより繩が遅いなあと話しておりました時に、「とった、とった、とったぞ！」と元気な声で帰って来ました。何を捕ったのかと飛びだしてみると、水かきのついた足の短い、丸太を短く切ったようなカワウソが彼の上に乗せてありました。それは当時、タマという男犬を飼っていましたが、その犬がいつも兄の後に歩いて歩いていたのであります。その日、丹羽さんのごちらの沢に来たとき、その犬が川に飛び込み、カワウソと格闘し、ついにかみ殺したのでありました。それを翌日調理しまして、近所の人たち4、5人を招いて試食の会をいたしました。

教会をつくろう

その翌年、まだ、どこの家でも冬の吹雪の夜など布団の上に1、2寸も雪が積もるというひどい小屋に住まつておりますながら、教会を建てようという相談が始まったのであります。そして、めいめいが、急いで秋の農場をかた付け、6、7人の信者が心をあわせ、労力を持って建築に取りかかりました。いよいよ明日は、屋根葺きだという日に雪が降り始め、翌朝はかなり雪が積もっておりました。時に父は、「ああ困った。わらじがきれてしまったし、履くものは無くて困ったなあ。」と母と話しております。そうした時に私が、学校へ行っておらず、退屈まぎれに、いたずら半分に「つまご」という蘿蔔を作ってみました。その薦といいましても、絶対に手に入らないので夏の土用過ぎ野に生いておる「くど」という草を刈り取って、それを乾燥しておき、繩にない、わらじを作ったのであります。そのくどで大人の履く「つまご」を作ってみましたが、恥ずかしいので、隠しておきました。父が困るというので、それをしてきて、父の前に出して履いてみなさいといいました。父は私の顔をみて、「よく、おまえこれを作ったなあ。ああよかった本当に助かった。」とたいそう喜んでくれました。その時の顔が今なお瞼に浮かぶのであります。そうして年内に教会は落成いたしましたが、年あけて2月頃に簡単な落成式を行いたいとの話が出たのでありますが、何ぶんも御馳走をこしらえる材料がなかったのであります。その頃、兄が野うさぎをとろうと、いくつも罠をかけておきました。ちょうどクリスマスの朝、大きなうさぎが1羽とれましたので、兄が喜んで小屋の中に吊るしておきました。2、3の信者の方が私の家に集まって来て、これを見て、ことに山本助太郎氏（現在の山本起男氏の祖父）が、「これはよかった。これは神様の恵んでくれたのだから、与えられたのだから肉のご飯に作りましょう。」とただちに料理にかかり、ついでにたぬき汁ならぬ、兎汁も作るんだと、その肉を板の上に上げてガングンとたたきつぶし、小麦粉を入れて汁を作ったのでありました。できたから先に食べさせようと、子どもといって10人ばかりがありました。中でも大食漢の私と天沼翠美君と、このような御馳走は4年間この方、拌んだことないので、めずらしいやら、おいしいやら、食うわ、食うわ、12、3杯も食べてしましました。それで、あとから、食べる大人の分が足りなくなってしまいました。

第一利別尋常小学校（神丘）ができたが、教会で学ぶ

そうして14歳になった年に第一利別尋常小学校（神丘）という児童20人位より収容のできない学校としたものが建ちました。14歳にもなって、小学校1年生ではなあ、というのと、仕事をすれば1人前にできるのでありますから、とうとうその学校へは1日も行かずになりました。そうして青年となりましてから教会の牧師の転任、赴任、宣教師の送り、迎えを国境まで10里的道を私が1人でやってきました。馬車で、駄馬で、橇でしたのであります。ふしぎなことには、学問もなく、無知な、算数といえば算盤の持ち方も知らない本当に愚かな者を神様は教え導いてくれ、教会の役員としたものを35年続けました。ことに会計を担当すること21年、会計といいましても出入りが少ないので大したことは無かったのですが、一番辛かったことは、相良牧師さんをお迎えしてひと月の謝礼が6000円。終戦後むやみに物価が暴騰して1升瓶の空いたのが百円もしたというのに、5人ご家族が6000円のお金でどうして過ごしていかれましょうか。でも、先生はこんな僅かなお金でどうするかということは顔色だに表さず、私の差し出す6000円のお金をおし頂いて、「いつもこんなに心配して申し訳ない。」と頭を下げられたのであります。その都度、その都度、私は、涙のにじむほど辛かったのであります。というのは、私の室内は、骨髄という難関な骨の病にかかり、左の足を切断まで6年かかり、ついに13年にこの世をさりましたが、その間の医療費に山林15町歩、畑地7町歩を失ってしまいました。その上、山ほど借財が残り、どうにもならないのでありました。ですから、自分が1銭も出さないで、信者の方々に「お前も献金しろ。あんたももつ

と歎金を増やしてくれ、」と言いかねたのであります。

瀬棚の海津さん・天満さんとの出会い

昨日、瀬棚の海津さんと天満さんからお祝いの言葉に記念品を添えて招待致しました。本当に感謝の気持ちで一杯でございます。

思えば14年前の昔、相良先生が瀬棚方面に伝道を開始し、海津さんのお宅に30人、40人の子どもをあつめて火曜学校を続けておられました。ある火曜日の日、先生のおともをして海津さんのお宅にお邪魔致しました。時に海津さんでは、お寺の総代をなさっておられるにもかかわらず、キリスト教の牧師を招いて、しかも、2階の立派なお座敷2間を開設し、30~40人の子どもを集めての火曜学校を続けておられるので、私は何か不思議の感にうたれました。でも、ご夫妻ともに信仰にはいられバプテスマをお受けになられ、まことのクリスチャンとなって今日まで、大きなご奉仕を続けられたのに、私は敬服しております。この23年間神丘に定住し、困難と戦い、尽くして来られた遠藤栄牧師が73歳にして昇天されました。その牧師さんの石碑をたてたいと思いつたままで、適当な石材を物色しておりました。ある用件で三本杉に参りました時に役場の前に、高さ5尺たらず、幅は広い所で1尺8寸。厚さは5寸か6寸という本当に適当な石を目に入れました。こうした石なればなあとしばし見とれておりました時に、そばに薪を小割りしておった人が、「それは、役所の石ではありません。天満さんが、青年たちのために何か歌を刻んで橋の袂に建てるんだ」とここに置いてあるんです。天満さんに頼んだら分けてくれるのじゃありませんか。」と言ってくれました。その時天満さんがトンネルの方に向かって急ぎ足で通られました。その人は、「ああ、天満さんは通る。とめて、話してみたらどうですか。」と言ってくれましたが、急ぎの天満さんの足を止めて話をするのは、何か失礼でもあるような気がしてその日は帰宅した。後日、相良先生とご一緒に、海津さんのお宅に行き、海津さんにその話を致しましたら、「今晚、天満さんが集まることになるのだから一緒に話をしましょう。」といつてくれました。そうして集まりの済んだあと、天満さんにお願いしたら、「牧師さんの石塔を建てるならあげますよ。」簡単に、しかも、こころよく、寄贈してくれました。私は、耐えられないほどうれしく感じたのであります。そうしたことが始まりであります。天満さんも洗礼をお受けになられ、熱烈なる信仰をお持ちになつて、手間も股も惜しむことなく、ことに多額の私財をささげて社会のために大きなご奉仕を続けてもらいました。こうした天満さんのご夫婦、天満さんは主に会つて兄弟姉妹となり善き信仰の友となつて頂きました。大いに力づられ、励まされておりますので本当に喜びに耐えません。感謝でございます。どうかこの先も、教会のため、地の榮のために、ご奉仕を続けて下さいますようお祈りするものであります。

相良先生はじめみなさんに感謝

私が、心から信頼し、心から尊敬し、心から慕うて参りました相良先生には、ここ10数年、特に私を愛して下さいまして、何かと教え、助け、導いて下さいましたことは感謝にたえません。お礼の言葉もございません。どうかこれからも、長く、長く、この世ばかりでなく、限りのない天の御国にまで、良き先生であつて、愛し、導いて下さいますよう心からお祈り致します。

石橋さんは、これまで何かと随分お世話になって、ついぞ言葉を巧みにしてお礼を申し上げたことはございませんが、心の中に絶えず感謝をしています。これから私は、日に日に肉体が衰え、従つて精神もまた鈍っていくのでござりますが、どうか、旧来通りご愛顧賜りますようお願ひいたします。

今日はありがとう

今日ここに集うてくれた、かあさんたちは、みんな揃つて善良なよいかあさんたちばかり。そうして孫たちであるあんたたちみんなの肉体は壯健であり、そして一人として不良もなく、一人として悪党もなく、みんな素直な柔軟な良い孫であるので、私は、この上ない喜びでありますように神様に感謝しているのであります。どうかこれから先き、言葉が、あんたたちのおこないが、全く主イエスキリストの御心中にない、神様に喜んでもらうことのできる立派な人間になつてもらうよう願います。そうして切に切に神様にお祈りを捧げるものであります。みなさん、今日は本当にありがとうございます。

9. 第3回大日本帝国議会で北海道開拓事業が取り上げられる

明治25(1892)年5月2日、第3回大日本帝国議会が開催された。前年の12月25日わが国で最初の議会解散となった。内務大臣の品川弥二郎、次官の白根專一郎らが、全国の地方官に選挙大干渉を命じた。その結果、死亡者25名、負傷者388名に達した。与野党の対立が激化するなかでの議会開会となつた。藩閥政治の弊害として、薩摩藩出身者が道府の要職を占めていた北海道開拓事業がやりだまにあげられた。犬養 犀、尾崎行雄らは、改進党に属し選挙大干渉を厳しく批判ていたが、その2人が神丘に大土地の貸し下げを受けていたので世間の注目を集めた。この部分の議事録を資料4に示す。

資料4 大日本帝国議会議事録（大日本帝国議会誌1, 1814pより）

明治25年5月10日

河野広中君、工藤行幹君より北海道殖民開拓に対する施政方針 北海道官有物払下げの件、北海道觀業委託金処分の件、札幌製糖会社及び札幌製麻会社の件、北海道土地貸付の件、炭鉱鐵道線路変更の件に付政府へ質問書を提出せられたり

北海道土地貸付の件

北海道拓殖の業を挙げんと欲せば土地の貸下を便するより急務なるはなし然るに土地貸下願書の道府に堆積するもの數万件の多きに及び甚だしきは三四箇年して尚未に指令を得ざる者あり之に反して或者は数百万坪以上の貸下を出願して容易に許可を得たり今其重なる者を挙ぐれば左の如し

一億五千万坪を三条實美外二名に 九百十七万千三百九十九坪を鹿島万兵衛に 百八十九千四百五十七坪を摺口文造に 四十万坪を山田顯義に 百六十万坪を菊池武夫外十七名に 二百三十万坪を森本義質に 百二十七万六千坪を渡本五郎に 二千二十五万坪を犬養毅外八名に 三百万三千百五十を佐藤昌介に 一千万坪を岩谷松平に貸下たる等是なり

以上払下の現況は如何にして今後幾箇年にして開墾をなし得る見込なるか此払下地の内原地の儘他人に売買譲与せしものあるや否や

10. 北海道開拓政策の見直し

時の政府は、実情を調査して指摘のようなことがあれば改めることを約束した。そのためには開拓以来続いて来た薩摩出身の北海道長官でなく、他の地域からの起用が必要であった。第4代北海道長官は、長野県出身の渡辺千秋となつた。この後を継いだのが北垣国道である。貸し下げを受けて開墾していない土地を調査してこれを返却させた。

11. 鈴岡への入植

明治29（1896）年に金原明善の小作人が主に石川県、福井県から移住した。この土地は、犬養 毅らが返却した土地であった。最初のころは、ここを北金原といっていた。

12.まとめ

神丘の黎明は、近代立憲政治の確立期を色濃く反映していて興味がつきない。この小論は木俣 敏の『悠久なる利別川の流れ』に多くの示唆を頂きましたことに記して感謝を表する。

文 献

若林 功, 1964, 二 渡島半島の開拓異彩. 加納 一郎 改定, 北海道開拓秘録(3), 時事通信社, 43-90.

木俣 敏, 1994, 悅久なる利別の流れ. 利別教会創立「百周年」実行委員会, 284p.

今金町神丘地区開基百年協賛会編, 1991, 黎明一神丘地区開基百年記念誌一, 313p.

